

普及指導情報

「少雨に伴う農作物等の技術対策について」

(第24号)

令和7年7月8日

佐賀県農業技術防除センター

(表題) 少雨に伴う農作物等技術対策について

(担当) 農業技術防除センター 専門技術部

- 気象庁によると、九州北部地方（山口県含む）は、6月27日頃に梅雨明けしたとみられます（平年より22日早く、昨年より20日早い）。
- 梅雨明け以降、佐賀県では、気温がかなり高い状況が続いているとともに、降雨が全くみられていません。
- また、1か月予報（7月3日発表）によると、向こう1か月の降水量についても平年より少ない確率が40%となっており、高温の上に少雨環境が続くことが予想されます。
- このような状況に対応するため、別紙のとおり、技術対策を取りまとめましたので、指導の参考にしてください。

【参考データ】

●1か月予報（令和7年7月3日発表）

九州北部地方（山口県を含む） 1か月予報（07/05～08/04）			
2025年07月03日14時30分 福岡管区気象台 発表			
特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高い状態が続く見込みです。	
向こう1か月 07/05～08/04	天候	期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	
	気温	平均気温は、高い確率80％です。	
	降水量	降水量は、平年並または少ない確率ともに40％です。	
	日照時間	日照時間は、多い確率60％です。	
1週目 07/05～07/11	気温	1週目は、高い確率80％です。	
2週目 07/12～07/18	気温	2週目は、高い確率80％です。	
3～4週目 07/19～08/01	気温	3～4週目は、高い確率60％です。	
気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）			
気温	九州北部地方 （山口県含む）	向こう1か月 07/05～08/04	10 10 80
		1週目 07/05～07/11	10 10 80
		2週目 07/12～07/18	10 10 80
		3～4週目 07/19～08/01	10 30 60
降水量	九州北部地方 （山口県含む）	向こう1か月 07/05～08/04	40 40 20
日照時間	九州北部地方 （山口県含む）	向こう1か月 07/05～08/04	10 30 60
■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)			

I. 水 稲

1. 生育ステージ

- (1) 極早期及び早期水稻 穂ばらみ期～傾穂期
- (2) 山間早植え水稻 分げつ盛期～幼穂形成期
- (3) 普通期栽培 活着期～分げつ盛期

2. 技術対策

(1) 極早期及び早期

- ①出穂期前後は、最も用水を必要とする時期であることから、水を切らさないよう飽水管理等に努め、最低でも黒乾状態を保つ。
- ②開花期以降は、間断灌水を行い、分枝根の発生と伸長を促して根の活力維持に努める。
- ③干ばつ条件では通常より圃場の乾燥が早く進むため、こまめな水管理を意識する。
特に、収穫1週間前までは少なくとも黒乾状態を保ち、玄米の品質低下を防止する。
- ④登熟期が高温になると成熟までの日数が短縮するため、適期から遅れて収穫しがちである。刈遅れや収穫後の籾の過乾燥、急速な乾燥は白未熟粒や胴割粒を増やすので注意する。

(2) 山間早植え

- ①分げつ期に黒乾状態が長く続いていれば、配水されると乾土効果を生じる場合がある。
このような時には、その後の茎葉の過大伸長やいもち病の発生を助長するので注意する。また、その際は穂肥の施用量に注意して倒伏防止対策に努める。
- ②活着後は、湛水状態は必要ないものの、圃場内に亀裂が生じない程度の節水栽培で、維持するようにする。
- ③山間部では、用水不足による漏水が激しい場合、用水確保ができた時点で、漏水止めを一旦行って入水するなどの用水の有効利用に努める。
- ④中干し後に水持ちが悪い圃場は、軽めの中干しとする。

(3) 普通期

- ①初中期一発除草剤の散布後に、湛水深が確保できない場合は、拡散粒剤やジャンボ剤の使用を避け、薬害の少ない除草剤を選定する。さらに、初中期一発剤の効果が十分に得られないことが想定される場合は、茎葉処理剤による体系防除を検討する。
- ②ノビエ等が多発した場合には、中後期除草剤を早めに処理するよう心掛ける。
- ③用水不足が生じた場合には、節水栽培に努める。圃場に用水を行き渡らせるために、事前に溝切りを実施し、蒸発散量の多い日中の入水ではなく、夕方から夜間にかけての入水を心がける
- ④活着期は、幼穂形成期とともに、干ばつに対する抵抗力が弱いことから、活着に必要な用水の確保に努める（各地区での節水栽培を徹底する）。
- ⑤活着後は、亀裂を生じない程度に、土壌を湿潤～黒乾状態で管理するよう努める。

(4) その他

- ①普及指導情報第22号（R7年7月2日）「高温に伴う農作物等の技術対策について」のI.水稻の項も参照する。

Ⅱ. 大 豆

1. 生育ステージ

- (1) 大豆は、播種前～出芽期となっている。
- (2) 干ばつにより、播種後の出芽不良や、出芽後の生育停滞が懸念される。

2. 技術対策

- (1) 播種時に干ばつで、用水の手当てが可能な場合は、発芽苗立ちを向上させるために、圃場へ湛水・落水した後に耕起・播種するか、播種後にうね間灌水を行う。
- (2) うね間灌水は、夕方、日が陰ったあとに圃場に入水し、圃場に水が行き渡ったら、すぐに落水し、少なくとも朝には完全に落水させる。日中の灌水は、高温・多湿により種子が腐敗し易いことから避ける。
- (4) なお、平うねでの灌水は、排水が遅延し種子の腐敗を招くことが多いので避ける。灌水する場合には、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。
- (5) うね間灌水後は雑草の発生が多くなることから、早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。
- (6) 用水の手当てがない場合は、降雨まで播種作業を待って播種する（播種深度は 4cm～5cm の深めとし、しっかりと鎮圧する）が、7 月下旬以降になる場合は播種量を増やし、生育量の確保に努める。
- (7) 播種適期幅内での播種が困難である場合は、他作物への転換を図る。
- (8) その他
普及指導情報第 22 号（R7 年 7 月 2 日）の「高温に伴う農作物等の技術対策について」のⅡ.大豆の項及び普及指導情報第 23 号（R7 年 7 月 3 日）の「大豆播種前後の技術対策について（干ばつ対策含む）」も参照する。

Ⅲ. 野 菜

1. 生育ステージ

- (1) 施設野菜の主要品目であるイチゴ、キュウリ、トマト、ナスは、一部の作型を除いて栽培終了期である。イチゴは、育苗ベンチや育苗床で採苗している時期であり、今後は子苗の採苗本数が確保されていく。キュウリは抑制作型の定植前～定植時期であり、一部で栽培が開始している。定植前のキュウリ、トマト及びナスは、次作に向けて土壌消毒を行う時期になる。
- (2) 夏秋野菜の主要品目であるナス、ピーマンは収穫期であり、生育抑制や着果負担による樹勢低下が考えられる。
- (3) 雨よけ野菜の主要品目であるアスパラガスは、夏芽の収穫期であり、萌芽量の停滞が考えられる。コネギとハウレンソウは、播種期から収穫期まで多くの生育ステージがあり、発芽不良や生育のばらつきが考えられる。
- (4) 露地野菜では、サツマイモが生育期であり、高温・乾燥条件が続くと生育が抑制され、収量低下を招く可能性がある。

2. 技術対策

- (1) 播種や定植は早朝あるいは夕方に行い、十分な灌水を行う。用水が十分量に確保でき

- ない場合は、植穴や播種条(すじ)または株元等に局所的な灌水を行う。
- (2) 播種後はラブリット等、定植後はポリマルチや厚めの敷きワラで畦を被覆し、通路にも敷きワラ等を行い、乾燥防止に努める。
 - (3) ハウス栽培や雨よけ栽培では、天井ビニールの上に寒冷紗等を被覆し、換気を十分に行うことで施設内の温度上昇を防ぎ、乾燥防止に努める。
 - (4) 果菜類等では果実を小さ目に収穫し、株の負担を軽減する。
 - (5) 十分な用水を確保するとともに、用水が少ない場合は、日没後の灌水が効果的である。
 - (6) 太陽熱処理の用水が確保できない場合、より用水が少なくて済む土壌還元消毒、または薬剤防除に切り替える。

IV. 花 き

1. 生育ステージ

- (1) 施設花きでは、キクおよびバラは、生育期から出荷期までである。カーネーションは、平坦地では植替え作業中で、山間地では生育中である。トルコギキョウは、平坦地では収穫終期と育苗中で、山間地では生育中である。
- (2) 露地花きでは、キク、ホオズキ、シンテツポウユリ等が生育期にあり、灌水設備のない圃場では、生育の停滞、草丈の伸長抑制等が懸念される。

2. 技術対策

- (1) 圃場が乾燥して生育が停滞している圃場では、早急に灌水を行う。用水が少ない場合は、日没後の灌水が効果的である。
- (2) マルチや敷きワラを行い、土壌乾燥の防止と地温上昇の抑制に努める。ただし、ホオズキでの敷きワラは、白絹病の発生を助長するおそれがあるため注意する。
- (3) ハウスでは寒冷紗等の遮光資材を被覆し、ハウス内の温度上昇を防ぐとともに植物からの蒸散を抑制し、葉焼け防止に努める。
- (4) アザミウマ類、ハダニ類、チョウ目類等の害虫発生が多くなるため、発生に注意して適期防除に努める。

V. 果 樹

1. 生育ステージ

- (1) 露地みかんは果実肥大期であり、少雨乾燥条件下により果実肥大抑制が懸念される。
- (2) ハウスみかんは加温時期の違いにより、収穫の終了した園から収穫中、生育中の園までさまざまである。
- (3) 落葉果樹は果実肥大期であり、少雨乾燥条件下により果実肥大抑制が懸念される。

2. 技術対策

(1) 共通

- ① 幼木、果実肥大期にある樹、樹勢が弱い樹、耕土が浅い園、キウイフルーツやウメ等の浅根性の果樹では灌水を実施するとともに、土壌からの水分蒸散と地温上昇を抑えるために、敷きワラや敷草を行う。
- ② 収穫が終了した園では、灌水を行い樹勢回復に努める。
- ③ ダニ類、サビダニ類、アザミウマ類、シンクイムシ類、カネタタキ等の害虫の発生が

多くなるので、発生状況に注意し、園内の発生状況を確認し、早期防除に努める。

(2) 露地みかん

- ①結果過多樹や過乾燥園では果実肥大が劣り、小玉果生産が懸念されるため、摘果して果実肥大を促すとともに、ホースやスプリンクラーで灌水を実施する。
- ②極早生、早生については、マルチの被覆時期となっており、土壌が乾燥しやすい園地では灌水実施後に被覆する。被覆後は果実肥大の状況により、摘果、灌水を実施する。雨水を利用する場合は、マルチが開閉できるように準備しておき、気象情報に基づいて過剰な雨水を入れないよう心がける。

(3) ハウスみかん

- ①収穫の終了した園地では、十分な灌水を実施し、樹勢回復に努める。また、地域によっては灌水に制限が設けられることも考えられるため、少量多灌水で対応するなど計画的に灌水を実施する。
- ②果実肥大期の園地では、果実品質や肥大、園内の乾燥程度に応じて灌水を実施する。成熟期の園地では、過乾燥になると着色の遅れなどにつながるため、樹を観察して最低限の灌水を実施する。

(4) 中晩柑

- ①果実肥大期であり、積極的に灌水を実施する。敷きワラ等で地表面を被覆し、土壌水分の蒸発を防止する。

(5) ナシ

- ①果実の発育期に乾燥状態が続くと果実肥大が不良となるため、摘果により結果量を調整するとともに灌水を実施し、果実肥大促進を図る。
- ②定植 1～3 年程度の幼木では乾燥が続くと樹冠拡大が遅れるので、5 日に 1 回 50L/樹程度の灌水を実施する。

VI. 茶

1. 生育ステージ

- (1) 現在、二番茶摘採がほぼ終了し、三番茶芽の生育初期を迎えている。
- (2) この時期に乾燥状態が続くと、三番茶芽の生育停滞や追肥の肥効が低下するおそれがあり、長期的には翌年の一番茶生産性低下に大きく影響することが懸念される。

2. 技術対策

- (1) 幼木茶園では、土壌からの水分蒸発を防ぐため、畦間に木材チップやワラ等を敷き、乾燥が続く場合には灌水を実施する。
- (2) 成木茶園では、土壌からの蒸発と地温上昇を抑えるため、裾刈りは控える。また、土壌水分で pF2.3 以上、もしくは畦間表層から深さ 20cm の土壌が乾燥状態になると灌水が必要な目安となる。
- (3) 灌水は、5mm 以上の雨が降らない期間が 10～15 日続いた場合、4t/10a 以上を目安に行う。スプリンクラー灌水できる場合は、7 日おきに 20 t/10a を夕方の涼しい時間帯に行う。農業用水を十分に確保できない場合は、根に水分が確実に届くように株元灌水や畦間への土壌灌注を行う。
- (4) 乾燥時は施肥しても成分が溶けず、降雨時に一気に溶出するおそれがあるので、追肥はできるだけ時期を遅らせ、降雨後に施用する。

- (5) カイガラムシ類、ハマキムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、ウンカ等の害虫発生が増加するおそれがあるので、茶園内の発生状況に注意し、早期防除に努める。